

【報告 3】

障害学生支援を開かれた＜コミュニケーション＞の場へ —行動分析学に根ざした方法論的な展開—

吉岡 昌子

(立命館大学人間科学研究所「大学バリア・フリー」チーム代表)

1. はじめに

立命館大学の吉岡です。よろしくお願いいたします。まず、本日の発表は、どのような方に向けたものかといいますと、職業的な研究者の方というよりはむしろ、障害学生支援の現場で働いておられる職員の方ですとか、当事者となる学生の方、あるいは、支援をする学生の方を聞き手として想定してきました。さきほどの倉本先生は、「問いかけをしないとことは始まらない」という言葉、それから「障害を文化として見るという、そういう認識の仕方を活用していくことが大切だ」というお話を出されました。私の話も、そのようなことを意図しています。そのメインとなるのは、「記述」です。私たち（研究者／実践家）は、いろんな場面で、支援を記録するというをしています。その記録する、記述するという行為について、これまでの認識をもう1度、考え直してみたい。そこから、どのような記録（記述）の仕方というものが、最初に提示したビジョンを追及するには、有用なのだろうか？ということについて、お話しいたします。そこで、色々な問いかけを混ぜて進めていこうと思いますので、ご一緒にお考えください。

2. これまでを振り返る

それでは、最初の問いかけです。「普段、どのように支援を記録（記述）

どんなふうに、支援を 記録（記述）していますか？

例えば、

- 支援の記録簿
- 支援に対する意見交換・評価
- 支援導入の計画書
- 内外の会議の報告書



していますか？」というものです。状況や場面は、いろいろなものがあります。たとえば、支援の記録簿を書くですとか、支援についての意見交換をしたり、計画書を書くなど。今日は、現場で関わっておられる方がたくさん来られていらっしゃると思いますので、その御自身の場面を少し思い浮かべて、振り返ってみてください。

そのような場面を振り返ってみると、このようなことが言えると思います。これまで、現場では膨大な実践（支援）の積み重ねというものがあり、それぞれの大学で試行錯誤が続けられてきました。一方で、「それをどのように記録するのか？ 他者に伝え、残していくのか？」ということについては、実際に支援をするという行為ほどには、試行錯誤がされてきませんでした。そのことについて、あまり意識もされてこなかったように思います。

実は、このことは、重要な問い直しの機会を与えてくれます。私たちは支援を積み重ねていくとき、必ず何か記録をしています（口頭でも、文字でも、手話でも伝えるモードは何であれ）。ですから、それは決して軽視できないプロセスであって、本来、支援をするということと同様に重みづけをすべきものではないでしょうか。

この問いかけと認識に立って、以降のお話では、効果的に実践を重ねてい

「これまで」を振り返ると

そこで

1. 効果的に実践を重ねていくために、「記述する」ということの意味を改めて確認する
2. 「これから」どうすればよいか？を行動分析学の視点から提案する

くために、記述するということの意味を改めて確認する、ということを行います。それを踏まえて、では、これからどうすればよいのか？ といった記述の仕方が有用なのかについて、行動分析学の視点から提案したいと思います。

なぜ、行動分析学の視点を取り上げるのか？ それは、このアプローチは、科学的方法論に対する応用的な観点として、それ（科学的方法論）は最終的に実践の人に使ってもらってこそ、その真価が発揮されるという、少しユニークな発想をもつ学問だからです。そのような視点から話をしてみたいです。

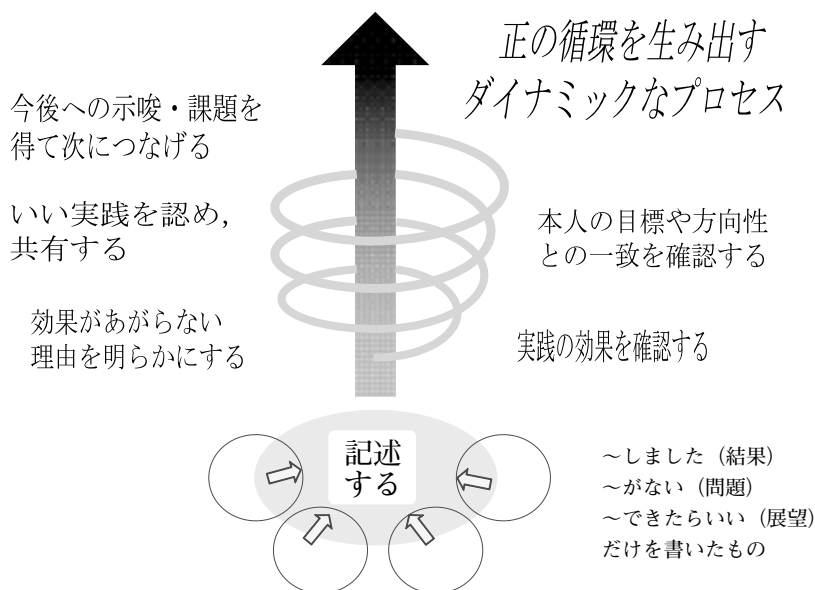
3. 記述するのは何のためか？

目次は、スライドに出ているとおりです。1つ目の「記述する意味とは？」というところから始めます。それでは、早速、2つ目の問いかけです。

「記述するのは何のためか？」 これは確認の意味での質問ですので、答えは当然とも言えますが... 何のためかというと、「支援を良くしていくため」ですね。では、もう少し掘り下げまして、「記述するという作業を通じて、支援を良くしていくとはどういうことだろうか？」これを次に考えてみたい

と思います。そのような状況を具体的にイメージするために、スポーツの場面、ここでは特にチームでやるスポーツを思い浮かべてみてください。たとえば、テレビでは、野球の打率が何割だとか、サッカーのシュートの決定率がどうか、コースの正確さがどうかよく言いますよね。つまり、必ずデータをとって、逐一記録していくということをやっているわけです。

では、スポーツの場合、パフォーマンス(障害学生支援では、支援や実践)をチームみんなで良くしていくために、「データをとって、逐一記録していく」という作業において、実際に何をしているのでしょうか。「チームのメンバーが集まって、自分たちがやったこと(実践)を記述する」という過程でなされていること、それは、このようなことです。たとえば、トレーニングの効果が本当にあったのか?を確認して、うまくいかない原因を探る、自分たちの目指すゴール・方向性と、実際に起こっている変化が一致しているのかどうかを評価する、また、良い実践を共有したり、互いにそれを認め合って、次につなげるためのチームの課題を見つけるなど。



つまり、記述をするという作業は、1人でやる静的なものではなく、本来はそれをやることで、**支援全体に正の循環が生まれるようなダイナミックなプロセス**になるものです。そのような視点から、これまで障害学生支援の分野の記述を見直すと、比較的よくなされてきた、「～しました」という結果を報告するだけの記述、「～がない、～はまだできていない」という問題を報告するだけの記述、あるいは、「今後、～ができたらいいい」という展望だけを述べた記述というのは、それをやっても、先ほど述べたようなダイナミックな循環を生み出さないという点で問題があります。

このことは、別の観点からみると、もし今、現場でそのような記述がなされていたとしたら、記述を工夫するだけで、支援自体の効果が高まる余地が残されているということです。つまり、2つ目の問いかけに戻りますと、「記述することを通じて、支援をよくしていく」というのは、今の状態、たとえば現場で起きている変化を公正にモニタリングし、その推移を明確に描き出していくということです。そして、**自分たちの実践の意味をその効果も含めて再確認し、互いをエンパワメントしていく**（互いに力を引き出しあい、強化しあう）ということです。

タイトルに「開かれた＜コミュニケーション＞の場へ」と入れましたが、それは、まさに図に示した関係者が互いの力を引き出し、高め合うというプロセスが、障害学生支援の現場で具体化されることを目指すものです。

4. 開かれたコミュニケーションの中心にあるもの

では、今度は、「開かれたコミュニケーション」の中心にあるものとは何だろうか？という問いかけをしてみたいと思います。これには、重要になる視点が2つあります。1つ目は、これまで支援の場面では、「内輪」でしか通じないような記述の仕方というのが比較的多かったと思います。ここでは、そうではなく、少しでも多くの人が了解し、共有できる記述の仕方とは何か？を問う視点です。もう1つは、支援をするときには、何らかの目的を特定します。この目的の達成に有効な（役に立つ）書式というのは何か？を問って

いく視点です。

まとめると、開かれたコミュニケーションとは、みんなが了解・共有できるという意味での「**了解性**」と、支援の目的を達成することへの「**有効性**」、この2つが重要になってきます。それでは、この記述（記録）の了解性と有効性、これらを本分（職）としているのは、いったい誰でしょうか？ 実は、既存環境を良くする手立て（支援）をどうすれば、多くの人に伝え、共有してもらえるだろうか？ あるいは、どういう書式を使えば、支援を目的達成に有効なたちで記述できるか？ これらを常に問いながら仕事をしているのは、対人援助の科学であり、またその研究者です。

一般に、実践家（現場の人）と研究者という言い方で、職制を区別することがあります。この場合に、現場と研究者を分ける違いは何かというと、実践をやった後の違いです。研究者は、必ず実践をしたら、それを社会に公表して、還元していくというプロセスが、職制に組み込まれています。具体的には、論文を書いたり、学会で発表をしたりなど。いわゆるアカウンタビリティ、説明責任と言われるものです。もちろん、このシンポジウムでの発表もそうですが、対人援助の科学に社会に発信し、還元していくという作業は欠かせません。

では、もう1つ問いかけをします。今度は、「どうすれば、たくさんの人に支援の強みを伝えられるだろうか？ 書式をどう工夫すれば、有効にこの支援を記述できるだろうか？」という視点で考えたとき、そのような記述をする「チャンス」が訪れるのは、いつだろうか？ という質問です。

この答えは、「いつでも」です。今、私がみなさんに向けてお話をしているこの瞬間もそうです。どうすれば、必要とする相手に、自分のやっていることが伝わるか？ ということを考え、試行錯誤するチャンスはいつでも訪れます。ですから、このような意味でのカガクテキ方法論というものは、職業的な研究者の決して専売特許ではありません。

では、くどいようですが、もう1つ。「開かれた言葉を使うのは誰か？」この答えは結局、学生も職員も教員も「みんな」です。障害学生支援の現場では、たくさんの学生が支援提供者として関わっています。その人たちが、

自分たちのやったことを社会に発信していく、その時点でその学生は、まぎれもなく研究者になるわけです。

5. 行動分析学の方法論：公正で開かれた言葉を話そう！

では、今度は、実際にその了解性と有効性をもつ記述の仕方とは、どういうものか？ 具体例を通して考えてみたいと思います。

1) 研究の概要

その具体例は、私が大学院生のとき、修士論文でやった研究です。対象としたのは、ろう学生へのノートテイクの場面です。「ノートテイク」というのは、高畑先生のご発表でも何度も出てきたもので、今、ここに映っているのもそうです。聴覚障害学生に音声の話を文字にして伝えるという支援です。これはパソコンを用いていますが、自分の研究で対象としたのは、手書きによるノートテイクでした。対象とした講義は2つ、参加者は、ろう学生、ノートテイク、教員でした。

2つの講義の支援をする前の状況は、三者とも同じ教室にいるものの、講義前後に直接のやりとりというのは、まったく見られませんでした。その頃、私が考えていたのは、学生の立場だからこそできる研究をしようということでした。そういう視点で、ノートテイクの質の向上を目的とした支援の研究計画を組み立てていました。そして、現場を見たり、いろんな立場の方にヒアリングをしたり、先行研究に当たる中で考えたのは、せっかくの教育場面なのだから、もっとろう学生、ノートテイク、教員の三者がコミュニケーションをすることで、ノートテイクのパフォーマンスを向上させていく、そのような支援の方向性でした。

そこで、もともととの状態で、三者の直接のやりとりが生まれないのは、コミュニケーションをするための書式と機会が不十分だからではないかと仮説を立てました。そこで、支援の内容は、これらの2点を補うツールの導入とし、それによって、三者の直接の相互作用（質問や助言、フィードバックな

ど)は増大するか、また、相互作用の増大は、ノートテイクのパフォーマンスを向上させるかを検証することとしました。

導入した支援ツールは、A4版2枚のシートです。まず、セルフチェック欄のところでは、三者にやりとりが生じるように、使っている筆記用具の読みやすさですとか、字間や行間の適切さといったノートテイクに関する留意事項と、それから、教員に対しても、たとえば、板書の量や話し方といった通訳者とうまく協働するために必要とされている配慮事項をリストアップしています。この部分をそれぞれに、5段階で点数をつけてもらいました。その次に、今回のノートテイクをした感想や良かった点、相手へのコメントをそれぞれに求めました。その自由記述欄の回答は、実験者を介してEメールで交換をするものとし、これによって、講義後に毎回、三者がやりとりをする機会と書式を提供しました。

手続きは、最初の数回のあいだ、コミュニケーションシートの回答を交換せずに、シートの項目に三者それぞれが回答のみをするベースラインを測定しました。その後、シートを使って回答を交換する介入の条件を測定し、ベースラインと介入の変化を比較しました。

2) 了解性と有効性をもつ記述をするには？

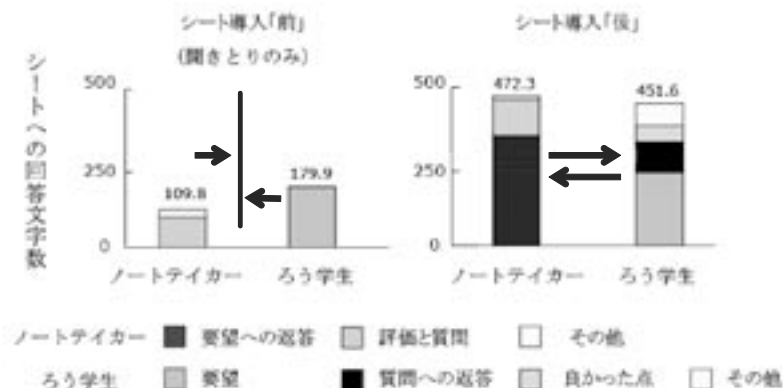
では、結果はどうなったか。今日の発表は、これまでの記述の仕方を変えてみようという提案ですので、2パターンの記述方法を提示し、結果そのものより、それらの記述の仕方に焦点をおいてお話いたします。

その1：前後の変化を比較する

これは、コミュニケーションシートへの回答行動の記録です。これは、ツールの導入の前と後で相互作用がどう変化したかを示したグラフです。

ここから分かることは、ノートテイカーとろう学生は、ベースラインの回答を交換する前から、評価や質問、要望などコミュニケーションシートに何らかの回答をしています。つまり、相手に対して、言うことがないわけではなかったのに、観察していると講義後に直接、伝える様子は見られないという状態だったことがわかります。それが、シートの導入後、どうなったのか？

①シートへの回答行動の記録（講義1）



※グラフは、シートの導入前と後で、テイカーとろう学生のやりとりがどう変化したかを、回答文字数において比較したものである

明らかなのは、コミュニケーションの量が最初は100字ほどしかなかったのが、導入後は400字以上に増えていることです。また、内容面でも、ろう学生の要望に対してはテイカーからの返答、テイカーの質問に対しては、ろう学生が返答するというように、コミュニケーションが双方向になったことが分かります。

次に、これまでの記述の仕方との違いを考えてみましょう。おそらく同じようなノートテイクの場面では、「今日はどうだった？」ということをつたねて、文章にして残していくというのが一般的でしょう。その場合、変化は、個人個人で主観的に感じられたり、「良くなった」というように判断されることはあっても、その判断が自分と相手とではどの程度、一致しているのか？をチェックする、あるいは、その場にいない（主観的な判断ができない）人にうまく伝えることはできないわけです。

でも、このようにグラフ化することで、相手と共有できる、開かれた言葉

をもつことができるわけです。では、これに問題がないかという、この記述の仕方では分からない重要なこともあります。

このグラフは、単に前後の変化を平均値によって比較しています。ですから、毎回の授業の中でどのように三者の行動が変化したのか、というプロセスまでは知りえません（野球の例で言えば、コーチの指導を受ける前と後では、平均すると投球スピードが時速3km上がったということしか分からないということです。つまり、効果の有無は見えるけれど、その変化がいつ現れ、どのように起こったかというコーチ（援助者）にとっての重要な関心事は、見えてこないわけです）。

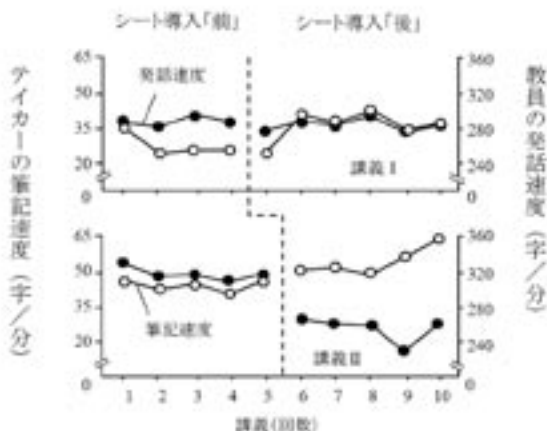
その2：変化の推移を記録する—行動分析学の方法論

そこで、この関心にそった1つの記述の仕方として、行動分析学の方法論を提案したいと思います。それが以下のグラフです。これには、シートの導入前と後の毎回の講義で、どのように行動が変わっていったのかという推移が出ています。ここに示されているのは、先生の発話速度と、それからノートテイカーの筆記速度です。時間の関係がありますので、割愛しながら進めていきますが、見ていただくと、講義Ⅰは支援を入れた後、シートの導入後も、それほど大きく値は変わっていません。しかし、講義Ⅱでは支援を入れた後、筆記速度が明らかに向上し、発話速度は大きく減少していることが分かります。このように毎回の推移を追っていけば、自分達の行っている支援の効果（効果がない場合はそのことを）を明らかにし、それをチームで共有できる（もちろん、それ以外の人も）ようにしています。また、起こりつつある変化の「推移」を拾っていくので、最初にお話した「記述すること」＝「互いを認め、エンパワメントしあうきっかけを増やすこと」になるわけです（たとえば、サッカーで得点を決めたときだけでなく、その都度の絶妙なプレーを「good job!!」といって称えるように）。行動分析学の記録のポイントの1つに、「何を言ったかより、何をやったかを重視して記録する」ということがあります。この点について、もう少しお話しします。

今出ているのは、今後の役に立つのではないかと考えてとった記録です。

シートを導入した後、2人の先生には、最初から測定しようとしていた行動以外にも、いくつかの講義スタイルの変化が見られました。そこで、それまで見られなかった講義場面での行動を毎回、書き出しました。この記録から分かるのは、シートを入れることで、明らかに授業実践が変わったということです。さらに、その内容を見ると、たとえば、講義Ⅰの5回では、話題転換の際に一言、前ふりが挿入されるようになったり、講義Ⅱでも、8回目以降、それまでは個別に掲載されていた資料の図表に、通し番号が振られるようになるといったことがありました。これらは、障害がある学生だけではなく、その授業に出ている全学生にかかわるものだと考えられます。そうすると、「では、教員の授業実践の変化は、他の学生の授業参加にどのような影響を与えたのだろうか？」という具体的な次の検討課題が見えてきます。また、こうした授業実践の試行錯誤を、「教育のユニバーサル・デザイン化と言われることの具体的展開」として捉えるというボトムアップ的な発想も出

②授業場面での行動の記録



※グラフは、シートの導入前と後で、教員の発話速度と、テイカ-の筆記速度がどう変化したかを比較したものである

できます。「やったことを記録する」ということの良さは、そのようなところにあります。

6. 記録することの意味（再び）

シンポジウムの最初で、「発信する」ことを重要視するとお話しました。最後に、その発信（発表）することの意味について考えてみたいと思います。発表する意味とは？ それは1つに、「**社会に実践の妥当性を問い、公正な態度を保ち続けるため**」ということがあります。つまり、自分たちの内輪の中だけでなく、社会にその実践を発信することによって、自分たちの価値だけを信頼するのではなく、社会的な価値を問い、支援を良くしていくスタイルを作っていくということです。

もう1つには、「障害学生支援の現場で発見したユニバーサルな環境のデザインを、大学全体、また社会全体へと普及させていくため」です。図のよ

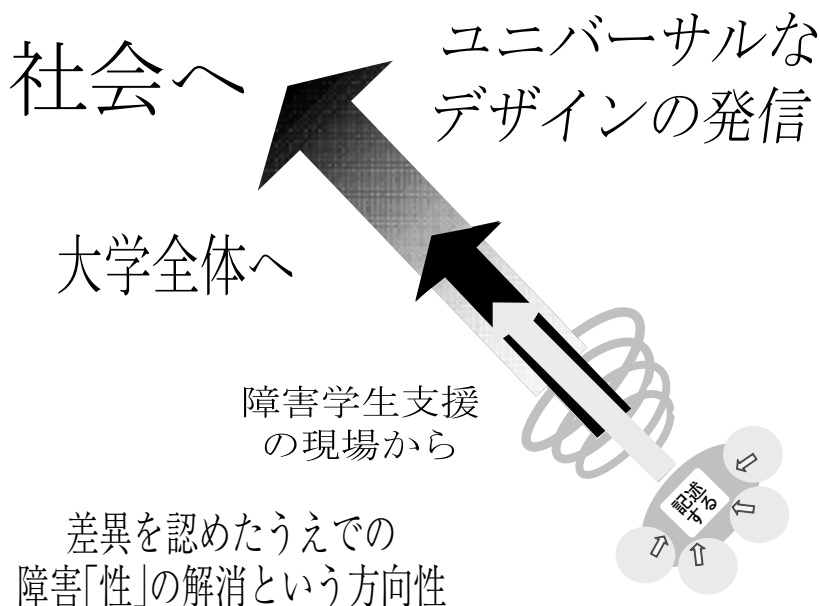
「やった（している）こと」を記録する： シート導入後に教員が「行った」新たな授業実践

	5回	6回	7回	8回	9回	10回
講義Ⅰ	- 講義前に配布資料の配布 ① 講義内容の要約を記入	講義中に声かけ、困った点などを確認	② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ の資料を提示 ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ の資料を提示		授業の進め方、本日の資料を⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳に提示	講義後に⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳を配布
講義Ⅱ		- 用語の教書 - 講義中に声かけ、困った点などを確認 - 問題などをシートに書くよう勧告	ビデオの撮影方法を講義者と学生に相談	- 資料の整理、⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳の整理 ⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳の整理		レポート課題と締め切りの教書

示唆① 他の学生も巻きこんだ授業実践の試行錯誤
示唆② 次なる課題・目標が具体的に浮かび上がる

うなイメージです。そして、このような発信作業は、ここでの発表もそうですが、行動分析学の記述の仕方をとることで、より効果的に行うことができます。変化の推移をグラフ化して記述することで、その場にいない人に対しても実践の現場で起こったことを伝え、その意味を問うことが可能になるわけです。

ユニバーサル・デザインという言葉を出しましたが、記述し、発信することは、ユニバーサル・デザインの普及において、もちろん不可欠な作業です。その方向性は、別の言い方をすると、「差異を認めたいえでの障害『性』の解消」というものです。具体例としてあげたノートテイクの研究も、「障害そのもの」（つまり、インペアメントのレベルでの障害）を変化させようとしているわけではなく、そのような意味での互いの差はそのままに認めるというスタンスです。そのうえで、一人一人の差異に応じた環境の設定を工夫することが、そのまま、既存のものとは違うユニークで豊かな大学教育を創



りだすことになるという方向に価値を見出しています。

シンポの前にお話したことに戻りましたが、本日のお話はここで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

(よしおか まさこ)

【司会 望月】

どうもありがとうございました。記述ということの大切さ、実際にうまくいった実践だけを記述するのではなくて、どのような場合も記述はしていただく、そういう意味では研究者と実践者の線引きはないわけです。また、効果的に記述することによって、学生と職員、大学の研究者、研究者と実践者のパートナーシップが図られるということは、よく理解できたかと思います。では、引き続きまして、本学の立命館大学障害学生支援室主事の二階堂さんに、「現場で働く職員の立場から」ということで、よろしくお願いします。